

日蓮宗生命倫理研究会主催
日蓮宗ビハーラネットワーク共催
講演会の報告

インド仏教と靈魂

山口県立大学教授・日蓮宗現代宗教研究所嘱託・東京都善應院住職 鈴木隆泰師

みなさま、こんにちは。今ご紹介に預かりました山口県立大学そして東京都善應院の鈴木隆泰でございます。本日、「インド仏教と靈魂」というテーマでお話をさせていただきます。どうぞよろしくお願い申し上げます。

結論の一部を先に申し上げますと、今までインド仏教は靈魂を認めていないかのように言われてきましたけれど、実はそうではないのだ、そし

講演会の報告

てそれに随って私たち日本の仏教徒、お祖師さまの流れを汲む我々は、同じように靈魂というものを大事にしながら教えを説いて人々を救っていいのだという結論になっていきます。安心してお聞きになって下さい。インド仏教を専攻している奴は靈魂を否定するんじゃないかと思われるかも知れませんが、逆です。インド仏教では靈魂をきちんと認めているという話になっていきます。

順を追ってまいりますね。

1. 「毒矢の譬え」

最初は「毒矢の譬え」という有名な説教です。ご存じの方も多いかと思われます。原文はパーリ語です。インドの古い言語ですね。『小マールンキヤ経』という経典、これは『中部経典（マッジマ・ニカーヤ）』の第1巻に収められています。

日蓮宗生命倫理研究会主催、NVN 共催で開催された講演会の中で、「インド仏教と靈魂」をテーマに実施された、山口県立大学教授で日蓮宗現代宗教研究所嘱託、東京都善應院住職を務める鈴木隆泰師による講演内容をご紹介します。

お釈迦さまのお弟子さんでマールンキヤープッタという方がいました。この方が十個の悩み・疑問を抱えているんですね。どういう悩みかというのを順に見ていきましょう。「世界は永遠か」「世界は永遠でないか」「世界は有限か」「世界は無限か」「いのち（靈魂）と肉体は同一か」「いのち（靈魂）と肉体は別異か」「如来は死後存在するか」「如来は死後存在しないか」「如来は死後存在しながらしかも存在しないか」「如来は死後存在するのでもなく存在しないのでもないのか」こういう十個の悩みです。

このマールンキヤープッタはこういう風に考えてしまったんですね。「これら十個の疑問に世尊が答えてくれれば、自分は清らかな修行ーインド語で梵行 (brahmacarya) ー一切の性交渉を断つ不婬に基づく出家修行のことを梵行、清らかな修行と

申しますーこれが続けよう。もし答えてくれないのであれば、自分は還俗し、お坊さんを止めてしまおう。」と、ここまで思い悩んだわけです。最後の試みとして、今までずっと答えてくれなかった釈尊、でも今回聞いて駄目だったら、もう還俗しようと思つて、最後の望みとして彼は釈尊のもとに赴くわけです。そうすると釈尊はやっぱり答えてくれないんですね。マールンキヤープッタはもう還俗してしまおうかなと思つているところに、釈尊が施した説法、それが「毒矢の譬え」です。

「マールンキヤープッタよ、もし世尊がこれらの疑問に答えてくれないのであれば、自分は清らかな修行を実践しない」という者があれば、その者は答えを得る前に死んでしまふであろう。」そして有名な「毒矢の譬え」が説かれます。若干長いんですね、これ。はつき

り言つて途中でうざい感じがしてきます。しつこいな、と。でも、このうざい感じが大事なんです、しつこい感じが。最後にそのうざい感じを

令和2年度第17回「心といのちの講座」講演資料
令和3年2月17日

インド仏教と靈魂

鈴木 隆泰¹

1. 「毒矢の譬え」
『小マールンキヤ經 *Cīṭamālunkyasuttanta* (中部經典 *Majjhima-Nikāya* i. 426.8-432.5)』

比丘マールンキヤープッタの悩み

- ・ 世界は永遠か (sassato loko)
- ・ 世界は永遠でないか (asassato loko)
- ・ 世界は有限か (antavā loko)
- ・ 世界は無限か (anantavā loko)
- ・ いのち (靈魂) と肉体は同一か (tapaṃ jīvaṃ tapaṃ sarīraṃ)
- ・ いのち (靈魂) と肉体は別異か (aññaṃ jīvaṃ aññaṃ sarīraṃ)

通り越して釈尊がとどめの説法を行ってくるので、しばらくはこのうざったい感じにお付き合い下さい。

「ある男が毒矢で射られた。彼の友人や同僚や親戚の者たちは、彼を医師に手当てさせようとした。ところが射られた当の本人は、「私を射た者のヴァルナ（四姓）はクシャトリヤ（王族、武人）階級か、バラモン（司祭）階級か、ヴァイシャ（庶民）階級か、シュードラ（隸民）階級か」

いわゆる四姓制度、ヴァルナです。よくこの四姓制度はカーストと勘違いされるんですけど、カーストじやありません。これは四姓制度、ヴァルナ制度です。カーストというのは、もつとこの四姓制度を元に発展して二千とか三千に分かれているのがカーストです。これは四姓制度、ヴァルナ制度と申します。続けます。

「私を射た者の名は何か、姓は何

か” 私を射た者は背が高いか、背が低いかな、それとも中くらいか”

“私を射た者の肌色は黒か、褐色か、金色か” 私を射た者はどの村、どの町、どの都市に住んでいるのか”

“私を射た弓は普通の弓か、それとも石弓か” 私を射た弓の弦の素材はアツカ草か、サンタ草か、動物の腱か、マルヴァー麻か、キーラパンニン草か” 私を射た矢の矢柄の素材はカッチャ葦か、それともローピマ葦か” 私を射た矢の矢柄につけられた羽は鷲の羽か、アオサギの羽か、鷹の羽か、孔雀の羽か、シテイハラヌ鳥の羽か” 私を射た矢の矢柄に巻いてある腱は牛のものか、水牛のものか、鹿のものか、猿のものか” 私を射た矢は普通の矢か、クラツパか、ヴェーカランダか、ナーラーチャか、ヴァッチャダントカ、カラヴィーラパッタか”

うざかったですよね。「これらが

全て判明しないうちは、自分はこの矢を抜かない、と言ったとしたら、その男はその答えを得る前に死んでしまうであろう。マールンキヤープッタよ、そなたも全く同様である。」で、この後ですね、この「マールンキヤープッタよ」という呼びかけのことばが頻出します。これも後で効いてきますので、いっぱいありますけれども飛ばさずに読んでいきます。大事な部分です。

「マールンキヤープッタよ、靈魂と肉体は同一である」という見解があるならば、清らかな修行を實踐しよう、というのはいさしくない。靈魂と肉体は別異である」という見解があるならば、清らかな修行を實踐しよう、というのはいさしくない。靈魂と肉体は同一である」という見解があるうが、靈魂と肉体は別異である」という見解があるうが、いずれにせよ生・老・病・死等の苦

があり（いわゆる四苦ですね）、私は現世においてそれらを制圧せよと教示する。（中略）」

「それゆえマールンキヤープッタよ、私が説かなかったことはへ説かなかったこと」として受け止めなさい。私が説いたことはへ説いたこと」として受け止めなさい。」

「ではマールンキヤープッタよ、私が説かなかったことは何か。マールンキヤープッタよ、霊魂と肉体は同一である」と私は説かなかった。霊魂と肉体は別異である」とも私は説かなかった。（中略）」

「マールンキヤープッタよ、なぜ私はこれらのことを説かなかったのか。マールンキヤープッタよ、それは、目的に適わず、清らかな修行の緒とならず、苦からの厭離、貪欲を離れること、無明の制圧、勝れた智である全き覚り、寂滅の境地である涅槃（ニルヴァーナ）へとは通じな

いからである。ではマールンキヤープッタよ、私が説いたことは何か。マールンキヤープッタよ、これが苦である（苦諦）」と私は説いた。これが苦の原因である（集諦）」と私は説いた。これが苦の制圧である（道諦）」と私は説いた（四聖諦）」

「マールンキヤープッタよ、なぜ私はこれらのことを説いたのか。マールンキヤープッタよ、それは、目的に適い、清らかな修行の緒となり、苦からの厭離、貪欲を離れること、無明の制圧、勝れた智である全き覚り、寂滅の境地である涅槃へと通じるからである。」

「それゆえマールンキヤープッタよ、私が説かなかったことはへ説かなかったこと」として受け止めなさい。私が説いたことはへ説いたこと」として受け止めなさい。」

このように世尊に説かれて、比丘マールンキヤープッタは納得し、世尊の教えに歓喜しました。そして彼は修行を続けていつて覚りを開いていくわけです。これが有名な「毒矢の譬え」ですね。ご存じの方も多かったですと思われる。

で、これがですね、いわゆる、死後の世界を考えた時、霊魂のことを考えたりすることを、私たちにためらわせる大きな理由になっていたわけですね。役に立たないことなので考えてはいけないのか、仏教は実利主義的なのか、と。「霊魂や死後の世界を考えることは、覚るために無益である」と読めます。少なくとも読める感じがします。これが私たちが萎縮させてきたわけですね。霊魂や死後の世界を考えてはいけないのだ、釈尊はそう説いているではないか、と。

実際に、仏教には諸法無我と申し

まして、我（アートマン）、靈魂というものを否定している（とされる）三法印があるじゃないですか。

諸行無常・諸法無我・涅槃寂靜という例の三法印です。無我説って入ってるんですね、諸法無我として。諸法無我、靈魂なんか無いんだ、というふうに教わってきましたけれども、本当にそうなのか、ということをやインドの原典に遡って確かめてみたいと思います。

これから読む部分は諸法無我の出典になっている部分なんですけれど、それを読んでいくと、いわゆる私たちが理解している諸法無我とは違った内容になっているのが分かります。ちよつと結論を一部先取りしました。では、2. まいりましょう。

2. 「無我説」は 靈魂の否定か

「無我説」は靈魂の否定か。釈尊は（伝承はいろいろあるんですが）

三十五歳で覺りを得て、そして初転法輪、最初の教えを説いて、その中で無我について説いているんですね。出典は『律蔵（ヴィナヤ・ピタカ）』の第1巻です。

釈尊は、かつて自分と一緒に修行をしていた五比丘に向かって最初の説法、初転法輪を行います。

釈尊は説きます。「比丘たちよ、身体（物質、色。ルーパ）はアートマン（自己の本体、靈魂）ならざるもの（非我）である。もし身体がアートマンであるならば、身体は病に罹ることはないはずである。また、「私の身体はこのようであれ」とか「私の身体はこのようでないように」

ともなしうるであろう。しかし身体はアートマンではないから、身体は病にも罹るし、「私の身体はこのようであれ」とも「私の身体はこのようでないように」ともなしえないのである。」

まず最初の部分で、これいわゆる五蘊なんです。色受想行識ですね、五蘊。最初は色（ルーパ、物質、身体）です。この色（ルーパ）がアートマンではない、と。アートマンがないとは言っていないんです。色がアートマンではないと言っているんです。

同様に、2番目、「感受作用（受。ヴェーダナー）はアートマンならざるもの（非我）である。」アートマンがないとは言っていません。アートマンではないと説かれているだけなんです。

3番目、「表象作用（想。サンジユニヤー）はアートマンならざるも

の（非我）である。」ここも同じです。

4番目、「形成作用（行）。サンスカーラ）はアートマンならざるもの（非我）である。」

5番目、「認識作用（識。ヴィジニャーナ）はアートマンならざるもの（非我）である。」

このように、色、受、想、行、識という五蘊すべてがアートマンではない、と釈尊は説いているのです。続けます。

「比丘たちよ、汝らはどう考えるか。身体は常住であろうか、それとも無常であろうか。」比丘たち「身体は無常であります。」釈尊「では、無常であるものは思い通りにならないか、それとも思い通りになるか。」比丘たち「思い通りになりません。」釈尊「では、無常であつて思い通りにならず、損壊する性質を持つ身体を、どうして、これはわたしのもの

である」とか「これがわたしである」とか「これがわたしのアートマンである」と見なすことができようか。」比丘たち「いいえ、できません。」釈尊「感受作用は（中略）、表象作用は（中略）、形成作用は（中略）、認識作用は常住であろうか、それとも無常であろうか。」比丘たち「無常であります。」釈尊「では、無常であるものは思い通りにならないか、それとも思い通りになるか。」比丘たち「思い通りになりません。」釈尊「では、無常であつて思い通りにならず、損壊する性質を持つものを、どうして、これはわたしのものである」とか「これがわたしである」とか「これがわたしのアートマンである」と見なすことができようか。」比丘たち「いいえ、できません。」釈尊「それゆえに、ありとあらゆる身体、感受作用、表象作用、形成作用、認識作用は（中略）」

“これはわたしのものではない” “これはわたしではない” “これはわたしのアートマンではない” と、如実に、正しい智慧をもって理解しなくてはならない。”

これが諸法無我の出典なんです、インド語原典の。ですから、無我説、無我説と言われてきましたけれども、その内実は、五蘊はアートマンではない、ということを経尊は説いていたんですね。ですから、正確に言いますと、諸法無我ではなく、五蘊非我なんです。五蘊がアートマンではない。つまり、アートマンそのものがあるともないとも説かれていないんです。五蘊はアートマンではないぞ、と。つまり、この諸法無我説の元をたどると、五蘊非我説で、アートマンの存在否定にはなっていないということが、インド語原典から分かるんです。

つまりそこから論理的に導かれる

ものは、五蘊以外にアートマンが存在する可能性を残すということです。あくまで、五蘊がアートマンではない、と説かれていますよね。五蘊以外にアートマンがある可能性を残した文脈なんです。ただし現存するパリー仏典では、アートマンがある、と明言してはいないのも事実なんです。

でも、それはパリー仏典を伝承したのが、上座部のマハーヴィハラ派という部派だったからなんです。実は部派によってアートマン、靈魂の捉え方が違っていたということが最新の研究で分かってまいりました。

3. です。

3. 靈魂を説いた部派が存在していた

実は、あまり知られていなかったのですが、靈魂を説いた部派という

のが存在していたんです。部派つてございますよね。釈尊の入滅後百年くらいして、釈尊の僧団（サンガ）が分裂を開始します。まず根本分裂を起こします。そのあと枝末分裂を起こしてたくさん部派に分かれる。そしてそのあとに大乘仏教が出てくるといふ流れになっているんですけど、そのたくさん分かれた部派の中に、靈魂を説いた部派が存在していたということが分かっています。

その部派は、犢子部（とくしぶ）といえます。インド語でヴァーツシープトリーヤといえます。この部派が「ブドガラ（靈魂、アートマン）」、「ブドガラと名付ける靈魂、アートマンの存在を主張していたことが分かっています。

この犢子部という部派は、かつて相当の影響力を持っていたんですけども、恐らく皆さんもほとんどご存じなかったのではないかと思います

す。現在ではあまり知られていません。マイナーになってしまってますね。靈魂を説いた部派があったということ自体が知られていないんです。

この犢子部によれば、ブドガラというものは何かといいますと、過去・現在・未来の三世にわたる業の担い手である輪廻主体として、有為法、これは作られたものを有為法と申しますね、作られたもの有為法でも作られていない無為法でもないものとして実在していると主張しました。つまり、犢子部によれば、法は有為法と無為法の他にブドガラというものがある、という風に主張したわけです。すなわち、作られたものでも作られていないものでもないものとして、ブドガラが存在していると犢子部は主張したんです。

ところがこれは、かの有力だった諸部派によって否定されるんです。

まず西北インドにおいて有力だったのが説一切有部という部派です。サルヴァースティヴァーディンという部派です。その教学によれば、一切法は有為法と無為法しかないんです。

一切法は有為法と無為法しかない。ですから我々がですね、一切法は有為法と無為法ですよね、それしか無いですよ、というのは実は説一切有部の理解に過ぎないんです。実はそれ以外の理解をしていた部派があったんです。でもそれはマイナーになつて歴史の中でほとんど消えていて、あまり知られてこなかった。それが最近発掘されたんです。戻ります。有力だった説一切有部によると、一切法は有為法と無為法よりなる「五位七十五法」に分類され、その中にプロダガラ（アートマン）は存在していません。この説一切有部の教学は、龍樹菩薩（ナーガールジュナ。西暦150年―250年頃の方で

す）と並ぶインド大乘仏教の大論師である世親（ヴァスヴァンドウ。400年―480年頃）の著作『俱舎論（アビダルマコーシャ・バーシュヤ）』に詳しく紹介されています。

『俱舎論』は仏教の基礎学です。古来、仏教を学ぶ者は必ず通らなくてはならない関門でした。私も学部4年生の頃に読ませていただきました。とても難しい書物だったです。でもそれが今の私の仏教理解の基礎を作ってくれています。ありがたい書物です。その『俱舎論』の教え、すなわち「一切法は有為法もしくは無為法のみ」という理解に立つとき、その範疇に含まれないプロダガラが認められる余地はないわけです。犢子部によればプロダガラは有為法でも無為法でもないものなんです。でも説一切有部では一切法は有為法もしくは無為法しかないのだ、と説いているわけですから、プロダガラが認めら

れる余地はなくなってくるんですね。それが仏教の基礎学になってしまったんです。ですから、プロダガラが認められる余地はなくなってきました。

さらに、南アジア・東南アジアに広まった南伝上座仏教の大寺（マハーヴィハーラ）派も、犢子部のプロダガラ実在説を異端の説として強く批判しました。異端になってしまったんです。

釈尊に始まる仏教は、大きく分かれて三つのルートで伝播していきました。北伝（漢訳仏教圏）、南伝（パーリ語仏教圏）、そしてチベット（チベット語仏教圏）に大別されます。これら三系統のいずれにおいても「無」と「有」の二つの潮流があったのですが、「無」の潮流ばかりがもてはやされたんです。そして元々あった「有」、何かが有るんだ、だから靈魂が有るんだと認めていく潮流が、いずれの系統においても批

判的に扱われるようになってしまっ
て、消えてしまっていたんです。

これが今まで続く仏教の流れなん
です。元々は「有」の潮流が仏教に
はあったんです。ここまで押さえて
おいて下さい。

飛びまして、日本人の他界観に入
ります。

4. 日本人の他界観

日本人は古来、これは『古事記』
にもありますように、死後の世界に
並々ならぬ関心(畏れ)を抱いてき
ました。イザナギとイザナミとい
夫婦の神様が日本列島を作りました
よね。その後、イザナミが死んでし
まう。黄泉の国に行ってしまう。で、
イザナギがどうしてもイザナミに会
いたくて黄泉の世界に会いに行く。
そうすると、もう死者になっていて
襲ってくる。恐ろしいけれども知り

たい、関心を持つんですね。死者と
触れあいたい、でも恐ろしい、とい
う二律背反した想いを日本人は持つ
ています。

なんで日本人は死者を畏れるかと
いうと、死者の魂にはーこれは全然
仏教の教理じゃありません、日本人
が昔から持つている考え方でー死
者の魂には死に起因する穢れ(死
穢)が付着すると考えられてきたか
らです。だから、会葬御礼の中に
「お清めの塩」が入っているんです。
塩によつて宗教的な意味で穢れを浄
化しようということを考えたんです。
で、この死穢がくつついてますから、
きちんと死者の魂を浄化しないと、
悪霊(祟り神)になってしまふ。
話は少し先走ります。だから日本
人は一所懸命お葬式するんですよ、
年回忌法要するんですよ。死者を崇
り神にしてはまずいからなんです。
そして、供養することで立派な神さ

ま(守り神)に成ってもらおうと考
えたわけです。戻ります。

また、死者の魂には生前の個性が
反映されるんです。ですから怨みを
もつて死んだ人の魂は、特に悪霊に
なりやすいんです。歴史好きの方は
ご存じだと思いますけど、崇徳上皇
ですね、平安末期に顕れて日本一の
大魔王と呼ばれた方です。保元の乱
クーデターですね、失敗しました。
保元の乱を起こして失敗して讃岐に
流されたんですね。あの讃岐、香川
県、とても良い場所なんですけれど
も、昔は朝廷、都から離れた場所と
して流刑の地にもなっていたという
ことです。そこで、恨み死にするん
ですね。で、平安末期に彼は朝廷に
呪いをかける。今までこの日本の王
と言えば天皇だったけれども、私が
今から呪いをかける、これからは天
皇でも何でもない者がこの国の王に
なるのだ、天皇朝廷は没落するのだ、

と呪いをかけて、実際そのあと、平氏政権の時代を迎えて、それ以降ずっと武家の世が続くわけです。朝廷が政治権力を失う。明治に至るまで朝廷の人間は、天皇朝廷が権力を失ったのは、崇徳上皇の呪いのせいだとずっと信じていたんですね。それくらい恐れられていた崇り神です。

また、菅原道真さんも有名な崇り神ですね。讒訴されて太宰府に流されて、そこで恨み死にをして朝廷に様々な仇をなす。そういう仇をなす崇り神をどうすれば良いかというと、祀ると良いんですね。死者の魂はきちんと祀れば、浄化されて祖先神（ご先祖さま）となり、子孫を守護する。たとえば、崇り神でも、浄化されれば善神になる。実際、崇徳上皇は今、京都の白峯神宮に祀られています。また菅原道真公は、日本各地にある天満宮に祀られているんですね。

こういう観念を日本人が持っているということを確認しておきましょう。これは仏教の教理とは関係ないんです。日本人が元々持っている、いわゆるエートス、日本人の気風です。誰もが持っている、誰かから教わるわけではなく自然と持っている感覚です。こういう感覚を日本人は持っているんです。

5. にまいます。

5. 「仏説」とはなにか

「仏説」とはなにか。それを規定した重要な教えがあります。載っているのは、これも原始仏典、初期仏典です。『増支部経典（アングッタラ・ニカーヤ）』の第4巻に載っています。原文はここに（資料5頁注1）載っています。これ滅茶滅茶大なることが書かれてあるんです。訳すところになります。「何であれ善く

説かれたものであれば、それは全て釈尊の直説である。」これ、逆じゃないんです。釈尊の直説は善く説かれたものである、じゃないんです。何であれ善く説かれたものであれば、それは全て釈尊の直説である、たとえば誰が説こうとも、です。

善く説かれたものとは何か、それは迷える衆生を救うものです。言説によって迷えるものを救う、そういうものであれば全部釈尊の直説とみなす、これが仏教の根本的特性なんです。だから大乘経典は仏説なんです。よく、大乘経典は釈尊の入滅後にできたから非仏説であるという方もいらつしゃいますけど、その方はこの仏教の根本的特性を理解されていない。仏教では釈尊が説いたから仏説になるんじゃないんです。人々を救うことばは全部釈尊のことばになるんです。それが仏教という宗教の根本的特性なんです。

仏陀のことば、もちろんこの定義はここです。その仏説とはオールマイティな神の声ではありません。例えば『新約聖書』の「ヨハネによる福音書」。『新約聖書』の心臓部は「福音書」という部分です。イエスという人の言行録ですね。「ヨハネによる福音書」は、こう始まります。「初めに言（ことば）があつた。言は神と共にあつた。言は神であつた。」つまり、神の声が神そのものとなつてオールマイティ。だから、このことばに従えという命令型の宗教ができあがつたんです。教えに従え、従いなさい、このことばに従え、という命令型の宗教ができあがつたんです。

ところが、仏教における仏陀のことばというものは、そのような命令に従わせるようなことばじゃないんです。相手に応じて出てくるんです。時・処・人・苦悩・願いの違いに

じて個々別々に処方された治療薬、だから沢山あるんですよ。『大蔵経』っていっぱいある、とても読み切れないじゃないですか。あんなにいっぱいできたのは、このように、違いに応じて個々別々に処方された治療薬だから、いっぱい増えたんです。

で、先ほど見た「毒矢の譬え」というのは、マールンキヤープッタに対する治療薬なんですね。彼マールンキヤープッタは、「世界の謎全てが解決しない限り修行をしない」と宣言したに等しいんです。たとえ釈尊が彼の疑問十個全てに答えたとしても、マールンキヤープッタはさらに、ではこれはどうでしょうか、これはどうでしょうかと、さらに別の疑問を次々と呈するであろうことを釈尊は見抜かれていたんです。ですから「マールンキヤープッタには、私が説いたことだけが全てであり、それ以上は問うな、と受け止めさせよ

う」という配慮をなさったんです。先の「毒矢の譬え」において、しつこいくらいに「マールンキヤープッタよ」「マールンキヤープッタよ」という呼びかけがありましたよね。まさしくあの呼びかけによって、この教えはマールンキヤープッタに向けたものなんだということが明示されていたんです。私たち向きじゃないんです。私たち日本人は靈魂や死後の世界があつた方が安心する人たちなんです。あれはあくまでマールンキヤープッタ向けだったんですね。「日本人の願い」。日本では亡くなった方を神（祖先神、ご先祖さま）・仏（仏さま）として畏怖し、敬い、お祀りしてきた伝統があります。このようにいうと、仏というもののは、修行して覚りを開いて仏なのであつて、死んで引導を渡されたから直ぐ仏に成れるもんじゃない、な

んてことを仰る方もいらっしやるんですけど、はつきり申し上げて、その方は仏教を分かっていらっしやらない。先に見た仏説の定義を繰り返します。「何であれ善く説かれたものであれば、それは全て釈尊の直説である。」

方便（ウパーヤ）。ウパーヤとは救済という意味ですが、元々は接近という意味があります。仏さまが私たちの側に近づいてきて下さって、私たちの手を取って導いて下さる、そのために近づいて下さる、接近という意味です。それが方便（ウパーヤ）ということばの原義です。そして救済という意味を持っています。仏さまが私たちを救うために私たちの元にやって来て手を引いて下さる、それが方便です。方便（ウパーヤ）、救済、仏教というと「くさい」と読みますが、救済（くさい）する力（りき）に基づいて生み出された、

人々を救い、安寧に向かわせる教えであれば、それを「釈尊の直説」と見なすのが仏教の根本的特性なんです。

日本人が仏教に最も強く望んだのは、仏教の力をもって除災招福を実現するとともに、死者の魂を浄化し、祖先神を強化することです。それを日本人は望んだんです。日本における葬式仏教は、日本人の心を安んじするため、方便の力が発揮されて形づくられた「釈尊の直説」に他ならないのです。

日本人は、亡くなった方が仏教の力をもって死穢が浄化され、清浄なご先祖さま・仏さまと成ることを願いました。そしてご先祖さま・仏さまからの守護・加護を希いました。これが日本人のエートス（気風 ethos）なんです。

ですから、「世界の謎全てが解決しないと安心できないんだ」という

マールンキープッタの人間ではなく、「魂・永遠のいのちがあると安心（仏教的には「あんじん」）できる」や「死後の世界があると安心できる」という人には、霊魂の实在や死後の世界を堂々と説いたら良いんです。何であれ善く説かれたものであれば、それは全て釈尊の直説だからです。堂々と説いたら良いんです。

仏教という宗教は、「教義を固定化しない柔軟さ」と「柔軟であるがゆえの強靱さ」、この二つを兼ね備えています。とても柔軟です、仏教という宗教は。硬直化していると、ポキンと折れてしまいます。柔軟であるが故に強靱なんです。我々はこの柔軟さを失ってはいけないんです。

6. 〈中道〉とはなにか

中道とはなにか。中道も非常に誤解されています。ですのでインド語

原典に遡って、中道を確かめておきましょう。

これまた初転法輪において中道が説かれます。『律蔵』の第1巻に載っています。釈尊が五比丘に向かつて説きます。「比丘たちよ、出家修行者は二つの極端（二辺 *anta*）を行なってはならない。（中略）比丘たちよ、如来は二辺に近づぐことなく、仏眼を生じさせ、仏智を生じさせ、勝れた智である全き覺り、寂滅の境地である涅槃へと通ずる中道（*madhyama pratipad*）を、目の当たりに覺つたのである。比丘たちよ、如来が目の当たりに覺つたところの、仏眼を生じさせ、仏智を生じさせ、勝れた智である全き覺り、寂滅の境地である涅槃へと通ずる中道とは何かと言え、それは八正道である。則ち、一、正見。正しい教え（*saddharma*）に基づく正しい見解。二、正思。正しい見解に基づく正しい

い意業。三、正語。正しい意業に基づく正しい口業。四、正業。正しい意業に基づく正しい身業。身口意の三業を調えます。そして五、正命。正しい三業に基づく正しい生活。仏教における正しい生活とは身口意の三業を調えた生活であることが分かります。六、正精進。正しい生活に基づく正しい努力。精進、正しい精進、精進せよ、と言っても、それは正しい生活ができてはじめて正しい努力ができる。誤った、正しい生活をできないで努力はできないということが分かります。七、正念。正しい努力としての正しい注意力。いわゆるマインドフルネスですね、これ。マインドフルネスとはこの注意力、正念、インド語のスムリテイ、これの英訳がマインドフルネスです。そして八番目、正定。正しく注意力を払い正しく〈自分〉を定める、である。比丘たちよ、これが、如来が目

の当たりに覺つたところの、仏眼を生じさせ、仏智を生じさせ、勝れた智である全き覺り、寂滅の境地である涅槃へと通ずる中道なのである。」
で、これが提示されたとして、さあ、これが中道だよ、八正道だよ、やっつてご覧なさいと言われてできるかと言われたらできないんです。なぜかと言うと、「何が正しいのか」ということが具体的に全く触れられていないからなんです。正しくしなさいよと言われても、何が正しいか分からない。でもそれが実は大事なんです。八正道において何が正しいのか明示されていない点がとても重要なんです。なぜかと言うと釈尊は、私は中道を実践して仏陀に成った、中道とは八正道である、そして繰り返して、私はこの中道、八正道を通じて仏陀に成ったのだ、と。つまり、人が仏陀に成っていく、人を菩提に、成仏へと導くものであれば

全部正しい。相手を菩提・涅槃へと導く道が正しい道で中道なんです。

人によって違って構わないんです。

これは医師が治療を施すのに似ています。眼病の人には点眼薬を、お腹の痛い人には腹痛止めの薬を、骨が折れた人にはギブスを施します。そしてそれぞれの治療によって患者は各自健康を取り戻していく。ゴールは同じなんです。でも症状が違う以上、治療は違うんです。違って構わないというのが、この中道なんです。

右の道と左の道がある時に真ん中を通るのが中道ではありません。それは中庸というものです。中道とは無関係なんです。儒教や朱子学で重んじられるのが中庸ですね。仏教の中道と中庸は全く違います。相手に応じた勝れた薬であれば全部中道なんです。相手を菩提・涅槃へと導く道（善く説かれたもの）であれば、

それは全て仏説だということです。

7. 靈魂はあるのか

そもそも仏教に於いて靈魂はあるのかどうなのか。そういうことに入っていきます。『相応部經典（サンユッタ・ニカーヤ）』の44・10に、「有無の二辺を離れる」ということで、次のように説かれています。これも原始仏典（初期仏典）です。

「アートマンが存在する」と断定すると常見（慢心の原因の一種）に陥るし、「アートマンが存在しない」と断定すると断見（虚無主義の一種）に陥る」と明確に釈尊が説いているんです。アートマンが存在すると断定してもいけないし、アートマンが存在しないと断定してもいけないのだ、と。そして、個別の治療薬としては、有我も、無我もあるんだというのが『中論』です。龍樹菩薩

の『中論』の第18章の第6偈に、こう説かれています。「諸仏によってアートマンは存在する」と暫定的に、つまり治療薬として説かれた。アートマンは存在しない」とも説かれた」と、かの「空」を重んじる中観派の祖とされる龍樹菩薩が説いているんです。

つまりこういうことです。仏教徒全員に通用する真実（三法印や中道など）と同レベルで、種々の対象を「ある」「ない」と断定することは、治療薬の固定となり、中道に反する二辺（極端 anta）となる。つまり、靈魂があることを仏教徒（いっっぱいいます。インド、南アジア、東南アジア、チベット、中国、朝鮮半島、日本、その他、今、欧米にも広がっています）全員に通用する真実としても極端になり、靈魂がないことを仏教徒全員に通用する真実としても極端になる。逆に言えば個別の治療

薬としては、靈魂（アートマン）も認められているわけです。

そして、アートマンの存在を説く経典の代表が『大乘涅槃経』や『勝鬘経』など、仏性 buddhahatu・如来蔵 tatthagatagarbha Ⅱアートマン anan を説く経典です。仏性を説く諸経典。仏性ってアートマンなんです。そして日本仏教は仏性説が基本のひとつです。我々日蓮宗もそうです。お祖師さまも仏性説に則っていらっしやいました。

そして『楞伽経』という経典は、仏性と阿頼耶識（業の担い手）を同一視して、これによって、アートマン Ⅱ 仏性 Ⅱ 阿頼耶識 Ⅱ 輪廻主体（いのち） Ⅱ 靈魂 という図式が仏教内でできあがっています。できあがっているんです。初期仏典（原始仏典）は仏説で大乘仏典は非仏説だという誤解が今でもあります。非大乘、大乘を問わず、仏教における教説は全

て個々別々の治療薬です。ただし『法華経』は除きます。『法華経』って仏教そのものなので。これは今回のテーマに外れるので述べません。各ご寺院等に配られている『全国布教師会連合会会報』の第27号、2015年に配られたもので、その中で私が詳しく『法華経』とは何かという話をさせていただいていますので、この議論はそちらに譲らせていただきます。

アートマンの話に入ります。『涅槃経』です。迦葉菩薩が問います。「果たしてこの輪廻する世界に、アートマンはあるのでしょうか。それともないのでしょうか。」釈尊「アートマンとは仏性のことである。仏性は一切衆生に存在する（一切衆生悉有仏性）が、それは諸々の煩惱に覆われていて、自分の中に存在しているにもかかわらず、衆生はそれを見ることができないのである。たと

えばある村の貧しい者の家に、無尽蔵の金の鉷脈があったとしよう。そこには一人の婦人が住んでいたが、自分の家の地下に金の鉷脈があるとは知らず、貧しい生活を送っていた。そこで、人を導く術に長けたある人がその婦人に、“婦人よ、こちらに來なさい。私はあなたに報酬を与えるから、家事をやっておくれ”と言うと、彼女は“もしあなたが私の息子に宝を示してくれるなら、私は参りましょう”と応えたところ、（中略）彼は“お前の家には金の鉷脈があるにもかかわらず、お前は知らないのだ。（中略）”と言って、（中略）そこで彼は家の地下から金の鉷脈を取り出して彼女に与えたのである。彼女はそれを見て驚嘆し、彼に帰依をした。それと同様に善男子よ、仏性（Ⅱアートマン）は一切衆生に存在するのだが、ただ見ることができないだけなのである。貧しい女の家

の地下に金の鉉脈が存在していたように。」

『大法鼓経(だいほつくきょう)』

という経典があります。「この『大

法鼓経』もそれと同様に希有である。

それはなぜかといえば、如来は入滅

したにもかかわらず、依然としてこ

こに住し続ける」と言い、アトマ

ンも我がものという観念(我所)も

ないと信じてきた者たちに向かつて、

今再び、アトマンはある」と説く

からである。」同じく『大法鼓経』。

「一切衆生・一切生類に仏性があつ

て、無量の妙なる相好によつて莊嚴

され光り輝いており、これを因とし

て諸々の衆生は涅槃を得るのであ

る。」そして『楞伽経』です。「仏性

は無始爾来、種々の煩惱にまわり

つかれているので、アーラヤ識(阿

頼耶識)と呼ばれる。」そして『宝

性論』。「仏性は(中略)思惟すべき

ものでも、分別すべきものでもなく、

ただひたすら信解すべきものであ

る。」同じく『宝性論』。「信によら

なければ、諸仏の最勝の道理である

仏性に通達することはできない。」

同じく『宝性論』。「仏性(中略)は

諸仏の境界であつて、たとえ清浄な

衆生であつても思議することは不可

能である。」最後に『勝鬘経』。勝鬘

夫人「世尊よ、本性清浄な仏性が、

客塵煩惱によつて汚されていること

は、諸仏の境界であつて、思議する

ことはできないものと私は思いま

す。」釈尊「勝鬘夫人よ、まさにそ

の通りである。(中略)ただ諸仏を

信じるほかはないのである。」

仏性がある、アトマンがあるの

だということは、信によつて通達さ

れるものであるということでありま

す。信に依らないと通達できないと

いうことは、信によつてはじめて通

達できる、ただ諸仏を信じるほかは

8. ログスとパトスと エートス

最後のチャプター。ログスとパト

スとエートスです。ログス(Logos)、

理性ですね。パトス(Pathos)、篤

い信仰心。そして、エートス

(ethos)、気風。我々は大学教育を

受けた方が多いと思いますけれども、

大学で教わる学問というのは、理性、

ログスに基づき、理屈に基づいて教

わるわけです。冷静な教育です。と

ころが我々僧侶の修行や布教という

ものは、篤い信仰心、パトスに基づ

いています。理屈じゃないんです。

しかし、日本の仏教というものは、

日本人のエートスや状況に応じるこ

とによつて、今日まで発展・存続し

てきたんです。

ログスを前面に出すと失敗するわ

けです。ああお坊さんの話、何か堅

苦しくて難しくて分かんないやっとなってしまう。ロゴスを前面に出すと失敗してしまうんです。逆に言えばですね、前面に出せないロゴスしか今ない点がむしろ問題なんです。

本当はロゴスを前面に出して、なるほどそうか分かったぞ、というふうに思ってもらわないと本当はいけないんです。今のロゴス、大学教育は前面に出せないロゴス。理屈っぽいんです。また、パトスを前面に出してもうまくいかないんです。お坊さん一人が熱くなってしまう。パトスというものは価値観・世界観を共有したものの間でしか通用できないんです。

私が思うのは、エートスに注目すべきだろう、と。実際に日本仏教は日本人のエートスに寄り添ってきたわけです。さらには時代や環境にも配慮。それらにに応じて教学（ロゴス）を再整備し、修行・布教（パト

ス）を実践していく必要がある。エートスに基づいてから、ロゴスを整備し、そしてパトスを実践していく。なぜならば、実際に積尊、お祖師さま、先師の方々は、そのようにされてきたからです。本当に積尊、お祖師さま、先師の方々を慕うのであれば、その方々の模倣をしなければ我々はならないのです。

仏教徒の定義がありまして、「積尊に信順し、積尊を規範となし、そして積尊を模倣する人々の総称」です。これは「積尊」を、お祖師さま、先師の方々と読み換えても全く同じです。ここでいう模倣とは全く同じ行為をするということではありません。日本人のエートスを基本とし、時代や環境にも配慮する。そしてそれらに応じて教学（ロゴス）を再整備し、修行・布教（パトス）を実践することです。

口ばっかりだと思われると困りま

すので、そのささやかながら私なりの実践というものをそこに示してあります。ひとつめが、「積尊の遺言」という論文でして、これです（積尊の遺言―その現代的メッセージを読み解く―、『山口県立大学大学院論集』7、2006、pp. 1-18）。私のホームページ、「鈴木隆泰」とグーグルで入れていただければ私のホームページに行けますので、そこにPDFで貼り付けてあります。「積尊の遺言」という、もちろんPDFで無料を読んでいただくことができます。「積尊の遺言―その現代的メッセージを読み解く―」。積尊の遺されたことばから、それがどういう意味で今読み取れるのか、ということに挑戦してみました。

それから『葬式仏教正当論』（鈴木隆泰、『葬式仏教正当論―仏典で実証する―』、東京・興山舎、2013）という本も書かせていただ

きました。これも日本人のエートスに基づいた私の仏教再構築の営みのひとつです。

そういうふうにエートスに着目しながら再構築していかないと、釈尊や、お祖師さま、先師の方々が、昔偉い人がいらつしやって、昔こういうことを仰っていた、昔の偉い人はこう仰っていたのだというレベルに止まってしまふんです。今通じることばにしないと「過去の聖人」になつてしまふんです。ということは、仏教そのものが「過去の宗教」になつてしまふんです。

そのためには、まず私たち自身が、ロゴスとパトスとエートスを協調して一致させなければいけない。頭で考えていることと、身体で行っていることと、胸の奥底で実は感じていることが、バラバラになつてしまつてはダメなんです。我々が一致して、なるほど心の底から納得して、布

教をし、実践をしていく。

そのさらなる試みが、日蓮宗新聞社から110円で頒布していただいている『お題目で送るお葬式』（鈴木隆泰、『お題目で送るお葬式―「南無妙法蓮華経」のお葬式・その意味と功德―』、東京・日蓮宗新聞社、2018）という小冊子です。

また、現宗研のプロジェクトチームがありまして、そこで作成したのが、『日蓮宗における葬送儀礼の意味』という報告書です。これは日蓮宗の教師専用サイトございますよね。あそこに現宗研の出版物というものが見られるところがありまして、そこにPDFで載っています。公開されているもので、その結論の部分を引っ張ってきました。この中では、お祖師さまの御遺文を沢山引用してきまして、お祖師さまのお考えがいかに日本人のエートスに寄り添っているかということを示しました。そ

れが、ここ（資料）です。「前節の引用箇所からも分かるように、日蓮聖人の他界観はインド伝来のそれとは異なり、日本人の他界観をほとんどそのまま反映している。」つまり日本人のエートスに寄り添っているということを示したわけです。「その象徴として、死後に魂が赴く（往詣する）浄土がこの世にある霊山という山である点と、その際に往生という輪廻転生を経験しない点（鈴木〔2018〕）、追善供養が可能な点などを挙げることができる。したがって本宗の場合、「日蓮宗としての葬祭「仏教」を教義レベル（ロゴスのレベル）で整備することが可能であると判断される。これは本宗の大きな強みとなるであろう。」（鈴木隆泰ほか、日蓮宗における葬送儀礼の意味、『現代宗教研究』53、2019、pp. 314-327。）

むろん、これは独りではできません

ん。みなさんと手を携えて、日蓮宗としての葬祭仏教をエートスに基づいて、日本人のエートスを基本として、ロゴスを再整備し、パトスを実践して行く、そういう場に日蓮宗がなっていければ、もしそうなれば、もっと力を発揮できるはずですし、このお祖師さまの教え、『法華経』の教えというものが、もっと人々に伝わっていくようになると、私は信じております。

是非今後皆さまと、このように手を携えて進んで行けたらと願っております。ご清聴ありがとうございます。南無妙法蓮華経。

